

# 1937年パリ万博における音楽

## Music at the 1937 Paris Exposition

井 上 さつき

INOUE-ARAI Satsuki

The “Exposition Internationale des Arts et des Techniques appliqué à la Vie Moderne” was held in Paris in 1937. Many foreign countries participated actively in the International Art Festival. However, in contrast to the smaller, more elitist spectacles planned before the leftist victory, the Popular Front was stingy when it came to “Manifestation musicale”, or concerts of the French music. The appointees of the Popular Front created more “popular” spectacles during the fair and the government generously sponsored the “Fêtes de la lumière”. The “Fêtes” were a series of evening spectacles, organized around the banks of the Seine, featuring modernist fireworks displays accompanied by music that was specially commissioned for the event. Among the eighteen composers, there were Marcel Delannoy, Claude Delvincourt, Arthur Honegger, Jacques Ibert, Olivier Messiaen and Darius Milhaud.

キーワード：パリ万博 Paris Exposition, 音楽展 Manifestation musicale,

「光の祭典」 Fêtes de la lumière

### 0. はじめに

19世紀後半のパリではほぼ等間隔で5回の万国博覧会が開催されたが、1900年を最後に、万博はしばらく開かれなかった。6回目のパリ万博は第二次大戦前夜の1937年に行なわれ、それが20世紀にパリで開かれた唯一の万博となった。

1929年のウォール街に始まった世界恐慌はフランスには遅れて波及した。フランスは他の国よりも恐慌の影響は少なかったものの1935年が最悪の状態となり、失業者の増大と中産階級の購買力の低下を引き起こした。一方、政治体制は非常に不安定で、1918年から34年までのフランスの内閣の平均持続日数は8ヶ月と25日に過ぎなかった。

1936年、左翼勢力が結集し、人民戦線政府が誕生した。社会主義者のレオン・ブルムが共産党

と手を組んだのである。人民戦線はファシズムと戦い、労働者の生活改善を向上させることをめざした。ブルム内閣は短命ではあったが労働立法や経済立法を行ない、賃金を維持したままでの労働時間短縮や、民衆を対象とする文教政策として、映画館・美術館の割引、有給休暇利用の際の鉄道運賃割引、スポーツ奨励、ユースホステルの拡充などを実施した。しかし、ブルム内閣は1937年には退陣を余儀なくされ、翌1938年には第二次ブルム内閣が成立したものの、ひと月ともたずに崩壊し、人民戦線内閣は実質的に終わりを告げた。その間、ドイツ軍はオーストリア併合を目的としてオーストリアに侵入し、第二次大戦に向けて緊張が高まっていった。

人民戦線政府は、短期間の政権ではあったが、新しい施策を次々に行い、1937年のパリ万博自体も、人民戦線政府の意向を強く反映したものとなった。この万博では、周知のようにピカソの『ゲルニカ』が制作され、スペインのパビリオンに展示されたが、音楽に関してもさまざまなイベントが行われ、当時の音楽界に大きな衝撃を与えた。

### 1. 1937年万博開催まで<sup>1</sup>

1937年万博が実施されるまでには、幾多の困難があった。当初この万博は、1929年から32年にかけて出された3つのプロジェクトをひとつにまとめたものとして計画され、1933年1月にダラディエ率いるラディカルな内閣の下で承認された。このときコミッセル・ジェネラルに任命されたのはエメ・ベルトーで、「装飾芸術とインダストリアル芸術」「労働者と農民の生活」そして「知的協同」という3つのテーマをもつ国際博として企画された。しかし、1934年1月27日、ベルトーは突然万博中止を告げた。主な理由は経済的なものだったが、フランス政財界を巻き込んだ大疑獄事件であるスタヴィスキー事件も影響していた。スタヴィスキー事件の混乱で内閣が相次いで倒れた後、新たに政権についたドゥーメルグの保守的な内閣は万博計画続行を決め、ドゥーメルグは友人で退職したばかりの高級官僚エドモン・ラベをコミッセル・ジェネラルに新たに任命した。ただし、その際、当初予定された万博の3つのテーマのうち、「装飾芸術とインダストリアル芸術」のみが残され、左翼の要求で加えられたあとの2つのテーマは破棄された。

ラベは比較的小規模な万博を企画し、27ヘクタールの敷地と30億フランの予算を計上した。そのうち28億5000フランはパリ市が負担するという案であった。したがって、政府が予算的に果たす役割は最小限であり、大臣たちは直接的には企画にかかわらないことになっていた。ところが、フランス国内での出展希望者が予想外に多く、また、外国からの参加希望も相次ぎ（44カ国）、それらの国々はしばしばパビリオン建設のための広大な敷地を要求したため、万博事務局は当初の計画を見直し、会場を広げていった。その結果、基本計画は実に20回以上修正され、開会時には会場の面積は当初の計画の4倍にもなっていた。

人民戦線下に進行したインフレの影響もあって、開催経費は膨れ上がり、当初30億フランだった予算は1936年末の段階で90億フラン近くに増えた。万博終了後、取り壊しの費用やその他の精算が済んでみると、かかった総費用はほぼ150億フランに達していた。当初の5倍もの費用がか

1 この部分の記述は主にPeer 1998と Moore 2007に基づいている。

かったわけである。一方、収入は16億88千万フランにとどまったため、差し引き130億フランの赤字となった。当初予算では、経費の大部分はパリ市が負担することになっていたが、その後の膨らんだ予算の部分は主に国が引き受けた。

このように雪だるま式に増えた開催経費と会場面積にもかかわらず、1937年万博の入場者数は延べ3,150万人で、5,100万人を集めた1900年万博には遠く及ばなかった。もっとも、フランスの観光産業は1937年に明らかに上向き、観光客がパリで消費する金額も増大し、フランス経済へのそれなりの波及効果はあった。

さて、万博のテーマは、先述したように、保守的なドゥーメルグが組閣した時代に3つのうち2つが削られたが、この内閣が左翼陣営から攻撃されて退陣し、中道右翼、さらに中道左翼へと政権が移るにしたがって、一度テーマから外された「社会問題」にも光が当てられるようになった。また、政府の万博に対する直接的な関与も深くなっていった。こうして、人民戦線が政権を握るまでの間に、1937年万博はフランスが総力をあげて取り組むべきイベントに格上げされた。諸外国がこの万博を自己宣伝の機会として利用しようとしたのと同様に、フランス政府もこの万博を国の内外にフランスの威信を示し、国内の士気を高めるために最大限利用しようとする方向に動いたのである。

ところが、会場建設は非常に遅れていた。1936年6月、左翼の国民戦線が政権を握ったとき、トロカデロ宮を壊して建て替えられることになったシャイヨ宮と、近代美術館に関しては工事が始められていたが、万博開幕まですでに1年を切っていたにもかかわらず、ほかの建物の大半は青写真の段階であった。しかし、ブルム内閣は万博の計画を変更して、万博予算を増やし、労働パビリオンや平和パビリオンなどが最後の段階で追加して建設されることになった。また、ブルムは組織委員会に干渉して、彼らから排除されていたモダニストの建築家ル・コルビュジェにパビリオンを作らせるなどした。

人民戦線は、近代的都市生活にかかわる製品や活動を集めたパビリオンの建設を進めた。たとえば「ラジオ・パビリオン」や「写真・映画・蓄音機パビリオン」などである。また、科学の普及のために作られた「発見のパビリオン」もこの政権によって作られたもので、このパビリオンは1937年万博においてもっとも成功したアトラクションとなった。

人民戦線内閣は、内閣がめざす「文化の民主化」政策に沿って、万博自体の「民衆化」を推進し、民衆を万博に近づけるためのさまざまな方策を取った。たとえば、地方から上京する観客のために運賃を割引いた「民衆列車」の運行や、週に一度入場料が半額になる日の設定、民衆のための宿泊施設などである。さらに、「民衆的な」祭典の実施にも多額の予算がつき込まれ、「ワイン」「労働」「収穫」「フォークロア」「植民地」をテーマにした屋外のフェスティバルが実施され、ポピュラー音楽や、民衆劇団の屋外での公演も企画された。さらに、数多くのスポーツイベントも実施された。

1937年5月24日、万博は予定どおり開幕した。当日、ドイツ、イタリア、ソビエト、デンマーク、オランダのパビリオンはすでに完成していたが、フランスのパビリオンで開場できたのは2つ

だけだった。多くの建物は7月半ばまでに完成し、開場したが、シャイヨ宮の新しい劇場は11月半ばに万博が閉幕したあと、ようやく完成するというありさまだった。この万博はそれまでに開かれた5回のパリ万博とは比較できないほどの混乱ぶりを呈したが、その状態は、第2次大戦に先立つ時期の、不安定なフランスの政情を反映したものだだった。

## 2. 音楽展への影響

万博準備期間中に右翼から中道勢力を経て左翼へとめまぐるしく政権が交代し、左翼の人民戦線政府の下で万博が開幕したことは、万博のあり方にも大きな影響を与え、万博展示には左翼と右翼の観点が共に存在することになった。それは、音楽関連のイベントに関しても同じだった。

1935年、オペラ座支配人ジャック・ルーシェは万博の「フェスティヴァル、スペクタクル、レセプション」セクションの長として、プログラムを提示したが、それはパスカル・オリイによれば、「クラシック」で「エリート主義的」であった (Ory 1987 : 35)。ルーシェによる「レセプション」のほとんどは、当然のことながらルーシェの率いるオペラ座で行われ、ガラ公演が主で、外国人の観客や要人たちを楽しませるように計画されていた。しかし、人民戦線はルーシェの提案と対照的に、新たに「フェスティヴァル、アトラクション、パレード、スポーツ」を統括するセクションを創設し (第13グループ第71セクション)、万博の屋外での祭典を取り仕切らせた。

その結果、万博計画当初から置かれていた「音楽展」は、それまでのパリ万博の流れを汲むイベントであったが (井上2009)、予算が切り詰められ、非常に限定された催しとなった。一方、人民戦線の政策に従って開催された大規模な野外ページェント「光の祭典」は時代を先取りした斬新な複合芸術の試みとなった。

ここではまず、万博後に刊行された報告書を参照しながら、音楽展の内容をまとめておこう (*Rapport général 1937*, t.5 : 53-59)。

今回、音楽展は「マニフェスタシオン・ミュージカル」と呼ばれ、フランス音楽のイベントを企画することを目的としていた (以下は音楽展という名称で話を進める)。この委員会の委員長は作曲家のアルベール・ルーセル、副委員長には、オペラ=コミック座の支配人を務めたこともあるアルベール・カレと、作曲家のジャン・ロジェ=デュカスとフロラン・シュミットの三人が就任し、その下に、コンサート、劇場、軽音楽、バレエ、そして民衆音楽の6つの委員会が設けられた。

万博の基本は展示される事物の「分類分け」であるが、今回の万博の音楽展は第1グループ「思想の表現」の第5セクションに分類された。委員たちが最初に召集されたのは1935年4月9日である。その後、副委員長にガブリエル・アストリュクスが追加された。

それから具体的な協議が始められ、1936年7月9日の委員会で最終的にプログラムの基本計画が決定された。この日の委員会が副委員長のカレが辞任し、その代わりにコンサート委員会の長であるイベールが就任した。カレが辞任した理由は不明だが、政権はすでに人民戦線の手に移っていた。万博開催中の1937年8月27日、委員長のルーセルが死去し、ランドルミーとバローがこのセクションのスポークスマンに任命された。

今回の万博では、音楽関係のイベントとして、ドイツ週間、ルーマニア週間、ポーランド週間などが盛大に開かれ、各国の音楽をまとめて演奏するという新機軸が打ち出された。

音楽展を担当する第1グループ第5セクションの目的はフランス音楽の催しを組織することで、フランス音楽のオーケストラ作品のコンサートと室内楽のコンサートがそれぞれ6回ずつ行なわれ、合唱と器楽のオルフェオンのフェスティバルも行われた。これらは19世紀パリ万博の音楽展の伝統を受け継ぐものだった。しかし、資金不足は明らかで、広報活動も不足したために、19世紀に開かれた一連のパリ万博の音楽展と比較しても、はるかに劣る内容となった。上述したように、人民戦線内閣は民衆的な催しには予算を惜しまなかったが、コンサート会場で行われるコンサートは「エリート」的であるとみなしていたのである。

#### (1) フランス音楽のコンサート

第5セクション委員会が開催したフランスのオーケストラ作品のコンサートは、パリの6つのオーケストラ団体——パリ音楽院演奏協会、コンセル・コロヌ、コンセル・ラムルー、コンセル・パドルー、パリ交響楽団、プレシオアン交響連盟——によって実施されることになっていた。これらのコンサートのプログラムはフランス音楽の代表的な作曲家、つまり、サン＝サーンス、ヴァンサン・ダンディ、フォーレ、ドビュッシー、ラヴェル、ルーセル、フロラン・シュミットと若手作曲家の作品を組み合わせていた。フランスのオーケストラの代表格であるパリ音楽院演奏協会は万博閉幕直前の11月に新しいシャイヨ宮のコンサートホールで演奏することになっていたが、ホールの完成が間に合わなかったために、コンサートは延期され、結局、開かれないままに終わった。

フランスの若手作曲家の作品は6回にわたって開かれた室内楽のコンサートでも取り上げられた。室内楽コンサートで演奏したのは、プレ弦楽四重奏団、パスキエ三重奏団、パリ五重奏団、クロワザ夫人、ベルナデット・デルプラ夫人、ジェルメヌ・セルネー夫人、ペシュナール夫人らの歌手、そして、マルセル・メイエ夫人、ビグナリー・サル夫人等のピアニストであった。

しかし、これらのオーケストラと室内楽コンサートは問題が多く、失敗に終わった。報告書は失敗の原因として、プログラミングが通常聴かれているものの繰り返しに過ぎなかったことや、予算がなくPRが不足したことなどを指摘し、このような形ではなく、助成金を与えて、それぞれの団体や芸術家の責任でコンサートを開催させたほうがよかったのではないかと述べている。報告書は大成功を取めた「ドイツ週間」について、成功した大きな理由は十分な予算を使って宣伝したからだと結論づけているが、後述するように、内容的にも雲泥の差があった。

#### (2) オペラ＝ブフ・フェスティバル

1937年万博の音楽展を司る委員会は、万博実験劇場（シャンゼリゼ・コメディ劇場）で、オペラ＝ブフ・フィスティバルを開催した。予算不足から、オペラやバレエのような大規模な作品の上演は問題外であったが、政府はオペラ＝ブフに関してコンサートよりは「民衆的」だとみなし、

資金を出したのである。

このフェスティバルでは若手作曲家のマニユエル・ロザンタールの《黒いめんどり》(1幕)、マルセル・ドラノワの《フィリピーヌ遊び》(3幕7場)など、前衛的な演劇様式と結びついた6作のオペラが初演された。それらのほとんどがオペラ=コミックとオペレッタの中間に位置する軽い作品だった(Moore 2007: 269-275)。

### (3) オルフェオン・イベント

オルフェオンはアマチュアの合唱団や吹奏楽団・金管合奏団などを指す。オルフェオンのイベントは19世紀のパリ万博で必ず行われていたものである。1937年万博も例外ではなく、合唱オルフェオンと器楽オルフェオンのフェスティバルが行われた。フランス国内では、合唱団、吹奏楽団、金管合奏団のそれぞれの連盟によって「優秀団体」と認定されている団体が参加し、外国の団体については、それぞれの国のコミッセル・ジェネラルに推薦された団体が参加した。

報告書には、「オルフェオンのイベントは芸術的にもすぐれており、大成功を収めた。このイベントに参加する同郷者や同国人の活躍を見に、地方や外国から多数の聴衆が万博を訪れた」とあるが、同時に「オルフェオン・フェスティバルは成功したが、オーガナイザーに与えられていた予算が不足していたことは明らかであった」とも述べられている。

このフェスティバルに参加したアマチュア団体は合唱部門で6団体(フランス、アルジェリア、チュニジア、ベルギー)、オーケストラはパリの3団体、吹奏楽団は8団体(フランス、ベルギー)、そして金管合奏団が4団体(フランス、ベルギー)に過ぎなかった。

### (4) 幻の企画

報告書は、「第5クラスは非常に有益な努力を行い、そのおかげで、フランス音楽は、1937年の万博において、その価値にふさわしい位置とはいかなくとも、非常に重要な位置——これまでフランスで行なわれた国際的な大規模な催しにおいては占めなかった位置——を占めることができた」と自画自賛しているが、実態は上述したとおり、貧弱な内容であった。

人民戦線内閣が音楽展を担当したセクションに対してまったく予算的な考慮を行なわなかったことは、このセクションがもともと音楽と振付けに関するイベントを企画するはずだったものが、予算不足のために、振付けを伴うイベントが立ち消えになったことにも現れている。

「ドイツ週間」が華々しい成功を収めただけに、フランスの音楽展の委員会はさぞ悔しかったであろうと推察される。報告書には、幻に終わった企画が次のように列挙されている。

まず、音楽展のなかで、もっとも大きなものになるはずであった企画として「トスカニーニの2週間」があった。

このイベントは音楽展のなかでもっとも大きなものになるはずであった。内容は、ドビュッシーのオペラ《ペレアスとメリザンド》、モーリス・ラヴェル・フェスティバル、そしておそらくヴェルディのオペラ《ファルスタッフ》も入る予定で、オペラの公演とコンサートの開催準備が進めら

れていた。トスカニーニはパリに立ち寄った際に、歌手のオーディションを行ない、オペラ座とオペラ=コミック座にもオーディションに出かけ、《ペレアス》の配役は完全に決まっていた。ところが日程的な問題のために、結局このイベントは中止された。

また、予算不足のために、実現しなかった企画として、(1) 2000席の大ホールの建設 (2) 500席程度の室内楽ホール (3) アルベール・カレのプランに従った野外オーディトリウム (4) 75人編成の万博公演用のオーケストラの4項目が挙げられている。

なお、万博期間中、国際現代音楽協会 (ISCM) の会議が開催され、各国の作曲家が集まり、オーケストラのコンサートが2回、ギャルド・レピュブリケーヌによるコンサートが1回、そして室内楽コンサートが3回行なわれた。

#### 4. 国際芸術フェスティヴァル (グランド・セゾン・アンテルナショナル)

音楽展委員会が主催したフランス音楽のコンサートが予算不足のためにまったく振るわなかったのに対して、シャンゼリゼ劇場を舞台に、各国のフェスティヴァルが華やかに開催された。報告書には、「国際的な大イベントにおいて、主要な参加国に、さまざまな期間で、その国の劇や音楽の作品を並べ、同時に、しばしば非常に異なるそれらの演出を比較することを可能にする機会が与えられたことは、これが初めてだった」と述べられている (*Rapport général 1937*, t.11 : 411)。

実際にはさまざまな国がそれぞれの芸術を「展示」することにより、各国の芸術がさまざまな観点から比較できるようにする、というコンセプトは過去のパリ万博でも、中心に据えられていたものであり、特に1878年のパリ万博の音楽展は、そのコンセプトに従ってさまざまなコンサートが計画された。しかし、1937年万博は、そこに音楽作品だけでなく劇作品が加わることにより、一層おおがかりな国際芸術フェスティヴァルという側面をもつことになった。

今回、このフェスティヴァルに参加した主要な国と団体は以下のとおりである (*Rapport général 1937*, t.11 : 410-416)。

まず、5月はモナコのモンテカルロ・バレエ団、ノルウェーのオスロ国立劇場。6月に入って、アメリカからフィラデルフィア・バレエ団。また、6月には、ルーマニア音楽の連続コンサートが開かれ、スウェーデンからストックホルム交響楽団が訪れた。

6月には「イギリス週間」が開かれ、ロンドンのサドラー・ウェルズ劇場所属ヴィック=ウィルズ・バレエ団の公演や、バーナード・ショウの『キャンデード』上演。

同じく6月にはオーストリアから、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 (ブルーノ・ワルター指揮) とウィーン・ブルク劇場公演が行なわれた。

スイスも積極的に芸術家を送り込んだ。まず、チューリヒ混声合唱団が6月に公演し、ついで、7月末には「スイス週間」が開かれ、ジョラ劇場公演等が行なわれた。さらに、10月には室内楽コンサートやエルネスト・アンセルメ指揮のスイス・ロマン管弦楽団とジュネーヴのシャン・サクレ協会の演奏でオネゲルの《ダヴィデ王》が上演されたほか、ドルナッハのゲーテアヌム劇場の公演が行なわれた。

6月にはまた、ポーランドのコンサートが行なわれ、ポズナニ大聖堂合唱団やポーランド・ラジオ放送局交響楽団のコンサート、ピアノや声楽のリサイタルが行なわれた。

ソビエト連邦はこの万博で、ナチス・ドイツの向こうを張って巨大なパビリオンを建設したが、芸術展示にも非常に力を入れ、ウラジーミル・ネミロヴィチ=ダンチェンコとコンスタンチン・スタニスラフスキー率いるマクシム・ゴーリキー劇場（モスクワ芸術劇場）を7月に送りこんだ。メイキャップ係から効果音係にいたるまで同行する大がかりな引越し公演で、ゴーリキーの『敵』やトルストイの『アンナ・カレーニナ』を上演した。

デンマークは6月と7月にバレエ団や合唱団、そして劇団公演を行なった。

ベルギーは10月に、プロ・アルテ弦楽四重奏団による室内楽コンサートや、ベルギー国立管弦楽団とチェチリア合唱団によるコンサートなどを開き、ポルトガルも10月に公演を行なった。

さらに、「パレスチナ週間」では、テルアビブのハビマ劇場の公演が行なわれた。

以上のように、各国は競って芸術家を派遣し、自国の宣伝に努めた。しかし、規模、内容ともに群を抜いていたのは「ドイツの芸術週間」だった。〔表1〕は1937年6～7月号の『ルヴェー・ミュージカル』の広告欄に掲載されたプログラムである。

表1 1937年万博 ドイツ芸術週間

月 日	開始	会 場	内 容	備 考
9月3日	21時	博覧会映画宮	ドイツ映画ガラ上演 (M.ヴィーマン主演『愛国者』世界初演)	
9月4日	21時	シャンゼリゼ劇場	ダンスのグランド・ガラ公演	
9月5日	21時	サル・ブレイエル	「ポピュラー&クラシック・ドイツリート」ガラ公演	
9月6日	21時	シャンゼリゼ劇場	R.シュトラウス 《ばらの騎士》	
9月7日	21時	サル・ブレイエル	ベートーヴェン 交響曲第9番《合唱つき》	
9月8日	20時	シャンゼリゼ劇場	ヴァーグナー 《ヴァルキューレ》	
9月10日	20時	シャンゼリゼ劇場	ヴァーグナー 《トリスタンとイゾルデ》	
9月11日	21時	シャンゼリゼ劇場	R.シュトラウス 《ナクソス島のアリアドネ》	フランス初演
9月12日	20時	シャンゼリゼ劇場	ヴァーグナー 《ヴァルキューレ》	
9月13日	20時	シャンゼリゼ劇場	ヴァーグナー 《トリスタンとイゾルデ》	

今回の「ドイツ芸術週間」は多大な期待感をもって迎えられた。公演に先立つ『ルヴェー・ミュージカル』の記事では以下のように書かれている (Revue Musicale. 1937 Juin-Juillet : 123)

ベルリン国立歌劇場が、歌手の一団だけでなく、100名の音楽家からなるオーケストラ、合唱、舞台装置、技術スタッフすべてと共に、8月30日、特別列車を仕立てて、初めて国外に出る。

世界的に有名なこの劇場はドイツ芸術週間の中で、6回の公演を行なう。ヴァーグナー2作

品、《ヴァルキューレ》と《トリスタンとイゾルデ》は、バイロイトで採用された新しい演出に基づき上演される。これはベルリン国立オペラの芸術監督、ハインツ・ティーティエンによるもので、その彼がパリ公演も取り仕切る。その他に、R. シュトラウスの歌劇2作品も上演される。《ばらの騎士》と《ナクソス島のアリアドネ》で、両作品とも作曲者の指揮で上演される。他の2人の有名なカペルマイスター、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーとカール・エルメンドルフも指揮する。

この記述から、指揮者だけをとってみてもR. シュトラウス、フルトヴェングラー、エルメンドルフという豪華メンバーをそろえた引越し公演だったことがわかる。また《ヴァルキューレ》は、この年に行なわれたばかりのバイロイト・フェスティバルでの公演とまったく同じキャスト、同じ指揮者(フルトヴェングラー)、同じ演出家(ティーティエン)、同じ舞台装置家(プレトリウス)によるものであった。

この《ヴァルキューレ》の公演は絶賛された。「バイロイトがそっくり引っ越したとはいえ、劇場の相違は想像以上に大きかったが、それを差し引いても、《ヴァルキューレ》の上演はドイツにおいても、バイロイトにおいてもめったに見られない成功であった」と『ルヴュー・ミュージカル』の批評家ロベール・ベルナルは評価している(Bernard 1937: 259)。

また、R. シュトラウスの《ばらの騎士》はすでにフランスの聴衆にもなじみ深い作品だったが、今回、《ナクソス島のアリアドネ》がフランス初演されるのも話題だった。

さらに、フルトヴェングラーの指揮でベートーヴェンの第9交響曲《合唱つき》の公演も行なわれた。

この豪華なプログラムと演奏者の顔ぶれを眺めただけでも「ドイツ週間」に対してドイツが非常に力を入れていたことがわかる。ナチス政権下、ドイツは「ドイツ週間」を通じて、音楽面でも優位にあることを、完璧な上演によってアピールしたのである。中心となるヴァーグナーとリヒャルト・シュトラウスという演目は、ロベール・ベルナルが『ルヴュー・ミュージカル』の批評において指摘したように、ドイツにおける新しい音楽の動向を示すものではなかった。「輸出」用にナチス・ドイツが選んだのが、ヴァーグナーであり、リヒャルト・シュトラウスだったのである。

ちなみに、ベルリン国立歌劇場は4年後の1941年に再びパリで引越し公演を行なうことになるが、そのとき、パリはドイツの占領下にあった。

## 5. 「光の祭典」

1937年万博は、正式名称が「近代生活に応用された芸術と技術の国際博覧会」であったことからわかるように、テクノロジーに重点を置いた博覧会であり、音楽面でも近代テクノロジーを用いた前衛的な数々のイベントが行なわれた。

これまで見てきたように、人民戦線内閣下の万博開催となったため、伝統的な音楽展は予算が削られ、他国と比較しても、19世紀のパリ万博と比較しても、著しく見劣りのする内容となった

が、その一方、近代テクノロジーに重きを置く人民戦線内閣が多額の予算を投じた「光の祭典」は音楽面から見ても充実した内容となった<sup>2</sup>。

「光の祭典」は、人民戦線内閣になってから万博の組織委員会に設けられた「フェスティバル、アトラクション、パレード、スポーツ」を担当する部署によって計画されたなかで、最重要かつ革新的だったプロジェクトである。これは、セーヌの河辺で音と水と光を使って行われた大がかりなイベントで、1937年6月14日から12月11日の間に開催され、特定の主題を持つ水と光のデモンストレーションに合わせて演奏するために、18人の作曲家に作曲が委嘱された。音楽展委員会は、「光の祭典」で音楽を担当する作曲家を、エンジニア兼建築家であるウジェーヌ・ボードゥワンの求めに応じて推薦した。このイベントのうち、フロラン・シュミットの《光》をはじめとする数作品は、会期中、何度か公演が行なわれた。〔表2〕は委嘱作品の一覧である。

表2 1937年万博「光の祭典」作曲家一覧

《夏》	ルイ・オペール	《春の祭典》	ポール・ル・フレム
《植民地の祭典》	エルザ・パレーヌ	《セーヌ河》	レーモン・ルシュール
《火》	アンリ・バロー	《美しい水》	オリヴィエ・メシアン
《ダンスの祭典》	マルセル・ドラノワ	《音楽の祭典》	ダリウス・ミヨー
《秋》	クロード・デルヴァンクール	《夢》	ジャン・リヴィエ
《千一夜》	アルトゥール・オネゲル	《ワインの祭典》	マニユエル・ロザンタール
《アポテオース》	ジャック・イベール	《光の祭典》	フロラン・シュミット
《子供らしさ》	デジレ・エミール・アンゲルブレック	《幻想》	ビエール・ヴェローヌ
《流水》	シャルル・ケックラン	《ボブリ》	モーリス・イヴェン

人民戦線内閣の進めたプロジェクトではあったが、委嘱された作曲家すべてが左翼だったわけではなく、政治的美学的に異なる信条をもつさまざまな作曲家が参加した。これは、作曲家の人選を依頼されたのが、伝統的な音楽展を統括する第1グループ第5セクションであったこととも関連しているのだろう。

作曲家のなかでマルセル・ドラノワ、アルトゥール・オネゲル、ジャック・イベール、シャルル・ケックラン、そしてダリウス・ミヨーのような作曲家は人民戦線に密接に結びついていたが、アンリ・バロー、クロード・デルヴァンクール、指揮者としても活躍したデジレ・エミール・アンゲルブレック、ポール・ル・フレム、オリヴィエ・メシアン、マニユエル・ロザンタール、フロラン・シュミット、ポール・ヴェローヌ、モーリス・イヴェンは異なる思想信条をもった作曲家で、たとえば、デルヴァンクールは極右に共感し、メシアンは前衛的な「神秘主義者」であった。

花火は建築家のボードゥワンとマルセル・ロッズ<sup>3</sup>によってデザインされた。彼らはまた、万博

2 「光の祭典」については、Rapport général 1937, t.11: 422-429. Moore 2007: 275-285. Simeone 2002: 9-17に基づいて記述している。

3 建築家で、プレハブ建築の推進者だった。

会期中続けられた、セーヌ河のイルミネーションの責任者でもあった。彼らのプロジェクトは非常に意欲的で、多数のテクノロジーを使用し、音楽に伴奏された水と光の饗宴を作り出した。ボードゥワンとロッズは当初このイベントを国際的な規模で考え、毎夜、指揮者がローマ、ベイルート、ニューヨークなどの指揮台から無線電信を使って、音楽と光と水の動きを統御するような案をもっていた。ボードゥワンとロッズは、1925年の博覧会で新しく開発された「無線電信」から流れる録音された音楽が、会場にいる聴衆にとって「サウンド・トラック」として機能したことを受けて、今回、万博会場全体を包括するサウンド・システムを構築するための革新的な方法を模索した。その結果、1) セーヌ河に設けられる噴水自体から音が出るようにする、2) 木々や地面に設置されたスピーカーを使う。それは、万博の通常の商業的なサウンド・システムを用いる、3) エッフェル塔に付けられたスピーカーから音が出るようにする、というシステムが実際に使われた。特別仕様の飛行機を用いて、空から音が発せられるようにするという案もあったが、これは実現しなかった。

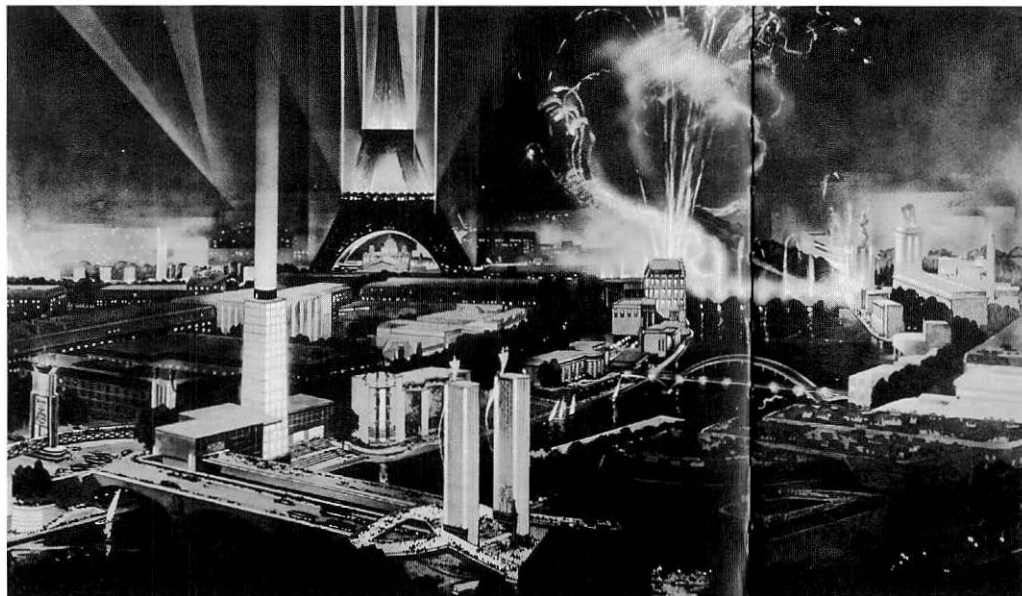
ボードゥワンとロッズはセーヌ河にスピーカーや花火を積んだ平底船やボートを浮かべ、それらはイベント当日、夜が更けてから、所定の位置に曳航された。また、噴水や霧を作る設備を備えた潜水可能な平底船が使用され、それらはイベントが始まるときにセーヌ河に浮かび上がった。

「光の祭典」では、30メートルの高さまで水を噴き上げる190の噴水、600の操作ボタンにつながった延べ60キロメートルに及ぶ電線、4000馬力の動力を使って生み出される毎時10万立方メートルの水が使われた<sup>4</sup>。このイベント全体はセーヌ河岸に係留された船に積まれた集中操作盤から指揮された。音と光や水をいかにシンクロさせるか、また、音のバランスなどについて1年に渡って研究が行なわれた。

音楽は、光と水のスペクタクルに合わせる形で、ちょうど同時代の映画音楽を作るように、作曲された。作曲家はボードゥワンとロッズによって用意されたシナリオに従って、光や水の変化に合わせた秒刻みのキューどおりに音楽を作った。その音楽は予め録音され、イベント当日、光や水の効果に合わせてスピーカーから流された。多くの作曲家——ケックラン、メシアン、ルシュール、シュミット、パレーヌ、ドラノワ、ル・フレム、ヴェローヌ——が新しく登場した電子楽器、オンド・マルトノを使用した。たとえば、メシアンの《美しい水の祭典》の楽譜は6台のオンド・マルトノのために作曲されているが、メシアンがオンド・マルトノを使用したのはこれが最初だった。

光と水の効果という点では、シャイヨ宮、トロカデロの庭園、エッフェル塔、そしてセーヌ河沿いの数々のパビリオンが照明され、花火が打ち上げられ、セーヌ河から噴水が上がった。「光の祭典」の各回の平均観客数は20万人近くになった。「光の祭典」はまさしく複合芸術的なイベントであり、音楽展の一部として開催されたオペラ=ブフのイベントと比べても、はるかに大衆のための真のエンターテインメントであった。民衆的な「祭典」の概念は、それが特に民衆的な革命祭典と強い関連をもっているために、フランスの左翼にとっては非常に重要だったのである。

4 Simeone 2002 に引用された『ソワール』紙の記事による。報告書には、噴水については「あるものは高さ60mに達する」という表現がされているほか、プロジェクターの数や消費電力などが記されている。



「1937 年パリ万博全景と花火」『ミロワール・デュ・モンド』  
1937 年 4 月号挿絵 (Ageorges 2006 : 182-3)

## 6. ラジオ放送とテレビ実験

一方、この万博で近代テクノロジーという点で特に注目されたのは、ラジオ放送である。ラジオのための特別なバビリオンが建設され、そこで万博期間中に活発な放送活動が行なわれた (*Rapport général 1937*, t.5 : 263-288)。

両大戦間の時期、テクノロジーの進歩とともに、レコードが普及したことは知られている。しかし、音楽の普及という点ではラジオは中心的役割を果たしていたのである。このことは忘れられがちであるが、当時ラジオは78回転のレコードプレーヤーよりも、はるかに一般家庭に普及していた。音楽にとっても放送は新しい時代の幕開けであった。第二次大戦前、ラジオ放送に音楽が占めていた割合は大きく、放送時間のおよそ6割が音楽に充てられていた (Méadel 1994 : 313)。ラジオ関係の最初期の職業人は音楽家であり、1934年には、放送用のオーケストラとして、アンゲルブレックによって国立放送管弦楽団が設立された (Méadel 1994 : 315)。また、パリ音楽院管弦楽団など、一般のオーケストラ団体による演奏も、しばしば放送され、ラジオ放送によって、人々の音楽聴取の習慣は変化し、コンサート活動は打撃を受けた。パリを例にとると、1930年前後に室内楽やオーケストラの活動が一時さかんになるものの、全体としては、コンサートの数は1920年代半ばから30年代のなかばにかけて減少したのである (Mawer 2003 : 253)。1937年パリ万博では、ラジオ・バビリオンが7月8日に開場した。そこでは放送の仕組み等が展示されたほか、多くのスタジオが設けられ、実際の放送の状況が見学できるようになっていた。大スタジオはオーケストラと合唱が演奏できる空間、中スタジオは管弦楽作品の放送用、そして小スタジオは室内楽の放送用、さらに、いくつかのブースが講演やアナウンサーの放送用に作られ、さまざまなプログラム

が放送された。また、テレビの実験も行なわれ、多くの観客を集めた。

万博のラジオ放送を担当した第16-2セクション委員会は、万博会場の音響面についてもかかわった。万博会場全体が適切に配置された多くの拡声器によって軽やかな雰囲気で包まれるようにという目的で、レコードを使った放送が計画されたが、そこで思わぬ障害が起きた。レコードに職を奪われることを恐れた音楽家組合が抗議したのである。人民戦線政府は労働者の権利を熱心に保護していた。交渉の結果、第16-2セクションは、万博期間中、二つの「生」オーケストラを一定の時間数雇用するが、残りの時間はレコードを使うということに落ち着いたが、それに加えて、このセクションは音楽家組合に一日につき100フランの賠償金を支払わなければならなかった。

こうしてオーケストラとレコードによる音楽放送が始められ、毎日、11時から13時45分まではレコード、13時45分から15時まではオーケストラ、15時45分から20時まではレコード、20時45分から23時まではオーケストラ、というスケジュールができあがった。しかし、こんどは、音楽著作権協会からクレームがつき、著作権としてひと月5万フランを協会に支払うように要求された。交渉の結果、全会期中6万フラン支払うことで結着がついたが、こうした問題はラジオ放送が始まって、新たに発生してきたものであった。

## 7. おわりに

1937年に行われたパリ万博における音楽のあり方は、この万博が開かれるまでの紆余曲折を反映したものとなった。その結果、伝統的な音楽展示に連なる「音楽のマニフェスタション」のプロジェクトは、フランス音楽をプロモートするのが主眼だったにもかかわらず、なおざりにされた。これはドイツなどが国の威信をかけて大規模な公演を行ったのとは対照的であった。一方、人民戦線の路線と一致したプロジェクトである、テクノロジーを駆使した「光の祭典」は、多くの観客を集めた。こうした実験的な試みは、第二次大戦後のフランスの前衛的な音楽創作の重要な基礎となったのである。

---

### 〔参考文献〕

- Ageorges, Sylvain. *Sur les traces des Expositions universelles : 1855 Paris 1937: A la recherche des pavillons et des monuments oubliés*. Paris: Parigramme, 2006.
- Bernard, Robert. « Le semaine musicale allemande », *La Revue Musicale*, 1937 octobre: 258-261.
- Labbé, Edmond. *Rapport général: Exposition Internationale des Arts et Techniques. Paris 1937*. Paris: Ministère du Commerce et de l'Industrie, 1938-1940. [Rapport général 1937 と略記]
- Mawer, Deborah. « French Music in the 1930s », in *French Music since Berlioz*, Hants: Ashgate, 2003:249-280.
- Méadel, Cécile. *Histoire de la radio des années trente*. Paris: Anthropos/INA, 1994.
- Moore, Christopher Lee. *Music in France and the Popular Front (1934-1938) : Politics, Aesthetics and Reception*. PhD diss., McGill University, Montreal, 2007.
- Ory, Pacal. « Le Front populaire et l'Exposition », in *Paris, 1937 : cinquantenaire de l'Exposition internationale des arts et des*

*techniques dans la vie moderne*. Paris: Institut français d'architecture: Paris-Musées, c1987.

Peer, Shanny. *France on Display: Peasants, Provincials, and Folklore in the 1937 Paris World's Fair*. Albany: State University of New York, 1998.

*Revue Musicale*. Juin-Juillet 1937.

Simeone, Nigel. « Music at the 1937 Exposition: The Science of Enchantment », *The Musical Times* 143, 2002 : 9-17.

井上さつき 『音楽を展示する——パリ万博1855～1900』法政大学出版局, 2009.